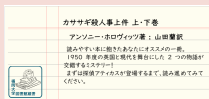


# 司書おすすめの本

図書館スタッフが選んだイチオシの本たちです。ふだん読まないジャンルの本も、これを機会に手に取ってみてはいかがでしょうか？




カードをクリックすると  
図書の詳細画面(蔵書検索)が開きます。



**カササギ殺人事件 上・下巻**

アンソニー・ホロヴィッツ著：山田蘭訳


読みやすい本に飽きたあなたにオススメの一冊。  
1950年度の英国と現代を舞台にした2つの物語が交錯するミステリー！  
まずは探偵アティカスが登場するまで、読み進めてみてください。



**ヘルシンキ生活の練習**

朴沙羅著


北欧は幸福度が高いとか、教育が素晴らしいとか、日本の良きお手本として例に出されることが多いですが、日本のために存在しているわけではない、と著者は言います。確かに！小さい子ども二人を抱えて京都からえいっとフィンランドに移住した著者の北欧礼賛ではない生活記です。関西弁のツッコミが笑える！



**休むヒント。**

群像編集部編


私はアンソロジーが好きだ。たくさんの人の文章を一度に味わえるから。  
ちなみに私がこの本がきっかけで「もっと読みたい！」と思った作家は、古賀及子、竹田ダニエル、永井玲衣。あなたは誰を追いかける？  
最後に…もちろん「休むヒント」が満載の本です。



**「読む」って、どんなこと？**

高橋源一郎著


この展示でも「本」を勧め、「本を読むこと」を勧めている。ところで「読んでどんなこと？ってちゃんと考えたことはあったらどうか？そんな問いに1〜6時間目までの授業形式で応えてくれる本。3,4時間目で取り上げられた文章はかなり刺激的。そして6時間目で深く深く考えさせられる。筆者は何のために読むと言っているのか。わずか116ページ。読んで確認して欲しい。



**世にも美しき数学者たちの日常**

二宮敦人著


大学の先生から数学マニアまでインタビューを通して、数学を愛する数学者たちの思考を覗き見ることができます。数学が好きな人はもちろん、数学を敬遠する人にも難しくなく読みやすいのでぜひ読んでみてください。数字に美しさを求め、難解な問題を解き続ける意味とは？数学の奥深さがわかります。



**酒をやめられない文学研究者とタバコをやめられない精神科医が本気で語り明かした依存症の話**

松本俊彦、横道誠著


文学者のマコトと精神科医のトシが依存症について往復書簡の形で語られます。とっても真っごく赤裸々な内容に驚きつつ、読みやすく面白さもあり、日本の依存問題から宗教についても考えさせられる本です。ヘイ、トシ！、ヘイ、マコト、とお互いに呼び合うという語り出しも楽し気です。この本を読んで、さらにお二人の他の本を読むとまた理解が深まりそうです。



**本棚**

ヒヨコ舎編


この本の本棚の写真を見て「世の中にはこんなに私の知らない本があるんだー!!」が正直な感想だった。写真集としても、ブックガイドとしても、エッセイとしても手帳に楽しめる一冊。本選びに迷ったときはこんな本からヒントを得るのもいいかも。みなさんの先輩が選書ツアーで選んだ本。ちなみに私はこの本を読んで尾崎翠を読んでみようと思った。誰と誰の本棚にあったか、あなたも探してみてください！



**あらゆることは今起こる**

柴崎友香著


ADHD(注意欠如多動症)の診断を受けた小説家が、小さいころから今に至るまでの困りごと、そしてそれにどう対処し、対処できなかったかをつづったエッセイです。困りごとを通して、「社会人」なら、「女性」なら、「普通」なら、できて当たり前というプレッシャーの多さに気づかされます。困っている人の内側を知るとは、自分の困ったことを理解する手助けにもなります。この本を読むことで、ちょっと気持ちが楽になるかもしれません。



**ぼく モグラ キツネ 馬**

チャーリー・マッケジー著；川村元気訳


2021年にベストセラーになった本。まえがきに「この本はだれでも楽しめる。あなたが8歳でも80歳でも」とあるように、今でも書店では絵本のコーナーにも単行本のコーナーにも並んでいる。  
★”いちばん強かったのはいる？”  
”弱みをみせることができたとき”  
★”たすけを求めることは、あきらめるのとはちがう”  
”あきらめないために、そうするんだ”



**アルケミスト：夢を旅した少年**

パウロ・コエーリョ [著]；山川紘矢、山川亜希子訳


ワクワクする冒険譚として読むのもよし。異国の物語として読むのもよし。ファンタジー、昔話として読むのもよし。そして哲学書としても読めるかも…どんあふうに読んでも楽しめるおススメの一冊！  
作者パウロ・コエーリョはブラジルの人気作家。原著はポルトガル語。この機会を逃したらブラジル人作家の作品を読む機会はないかも。ブラジル産コーヒーを飲みながら読んでみては？





**ガザとは何か  
パレスチナを知るための緊急講義**


岡真理著


6万7千人。ガザでの死者数。15分に1人が死亡。4万2千人。ガザでの負傷者。うち1/4が子ども。50万人以上。ガザで飢餓に苦しむ人。住民の1/4以上。(2025年初旬テレビ報道より)  
この本は2023年12月31日発行。同年京都大学と早稲田大学で、市民や学生有志が企画した講演会の内容を緊急出版したものである。  
著者は世界のメディアはこの問題のごく限られた一部分しか報じていないと断っている。わたしたちは本書を読み、ガザを正しく知ることから始める必要があると強く強く感じた。  
地獄とは、人々が苦しんでいるところのことではない。人が苦しんでいるのを誰も見ようしないところのことだ。(マンズルーアル=ハッラージュの言葉 本書より)






	<b>ガザからの報告</b>	
	<b>土井敏邦著</b>	
	想像してください。あなたはパレスチナ人で今ガザにいます。食事は「日」一回。電機は止められ夜は暗闇。テレビもスマホも見ることができない。浄水施設も停止。飲料水もなくトイレも使えない。家は爆破され、暑さ寒さ、雨漏り、蟻、蛇も防ぐことができないテント暮らし。感染症が蔓延、ガンも激増。しかし薬はない。こんな状況のガザから脱出することもできない。封鎖されているから。 ガザで暮らすジャーナリストが命がけて伝える「ガザからの報告」 私たちは目をそらさず、ガザの現状、ガザの人々の気持ち、願いを正しく知るところから始めるしかない。	


	<b>フィフティ・ピープル</b>	
	<b>チョン・セラ著；斎藤真理子訳</b>	
	著者が「あとがき」で告白しているように実は 51 の物語。 「何ももらえず搾取されるばかりの自分の世代の声を代弁したい」と常々思っている著者が韓国で実際に起きた事件や事故を舞台や背景として描いた小説。でも暗くなくむしろ明るく優しく、日本にいる私たち一人一人の胸にも届く。	


	<b>おいしいごはんが食べられますように</b>	
	<b>高瀬隼子著</b>	
	タイトルからはグルメ小説?と思うかも。しかし、帯には「職場小説」の文字。読み終えると表紙のイラストとは違った印象。スッキリさわやか、おいしい後味(=読後感)だけではない複雑な味が残る小説。第167回芥川賞受賞作品。	


	<b>対話号 (モンキービジネス；vol.5(2009Spring))</b>	
	あの柴田元章が毎号全力で作っていたという「モンキービジネス」。本号は「対話号」ということで、村上春樹のロングインタビュー、川上弘美、小川洋子の対談他翻訳4篇と小品が収載されている。 本学にはほかに「野球号」、「眠り号」、「少年少女号」、「箱号」ほかにも所蔵している。 翻訳、外国語に興味がある方、文学好きの方、ぜひ手に取ってみて!	


	<b>砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない</b>	
	<b>桜庭一樹 [著]</b>	
	すぐれた物語は年代を問わず、それぞれの形で胸に残る。この物語もそのひとつだ。しかしやはり「読み時(どき)」、「適齢期」はあるのかもしれない。砂糖菓子の弾丸を撃ちつづけた後や、弾丸を持っていたことさえも忘れてしまってから読むよりは、今弾丸を抱えている皆さんに読んで欲しいと思う一冊。	


	<b>キッチン</b>	
	<b>吉本ばなな著</b>	
	私はこの小説を1980年代に初版で読んだ。今ではこの世界観に似た物語もあるが、当時は衝撃を受けた。 吉本の『第一芸人文芸部』の吉本ばなな好きメンバー全員が「最初に読んだばなな作品は『キッチン!』!」と言っていた。あなたもこの本で『ばななワールド』の扉を開けてみては?	


	<b>八月の銀の雪</b>	
	<b>伊与原新著</b>	
	フィクションは苦手、小説は読んだことがない、という君にもおススメ。優しく心を癒してくれる 5 篇が収められている。地球の中心、珪藻、気象予報等、全ての物語に科学が重要なモチーフとして描かれていて、理系の君(もちろん文系のあなた)にも楽しめる一冊となっている。直木賞及び山本周五郎賞候補そして本屋大賞と折り紙つきの小説。	


	<b>世界と私の A to Z</b>	
	<b>竹田ダニエル著</b>	
	1997年生まれカリフォルニア在住の著者が2020~22年に雑誌に連載したものをまとめた一冊。アメリカの Z 世代の情報をシェアすることで「読んだ人にとってなんらかの希望や『世界が広がるきっかけ』になれば」と『おわりに』に記されている。アメリカの Z 世代が悩みながらも社会問題に関心を持ち、行動していることを知った。 福大生にも読んで感じて行動してほしいと切に思う。 ★戦い続けるために自分を愛する(本文より)	


	<b>繪本シェイクスピア劇場</b>	
	<b>安野光雅画；松岡和子文</b>	
	シェイクスピア、もちろん知っていますよね?どんな作品を残したかも...? シェイクスピア翻訳の第一人者、松岡和子がそれぞれの劇のあらすじを 1 ページにまとめ、安野光雅が画を描いています。シェイクスピアの入門書としても、アートブックとしても楽しめます。 To be, or not to be; that is the question. 名セリフ!どの劇のセリフかは本書で確かめて!	

	<b>超訳ニーチェの言葉</b>	
	<b>フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ [著]； 白取春彦編訳</b>	
	タイトルをみて「超訳」ってナニ?と思った人、時事用語事典には「原文にこだわらずわかりやすく、読みやすいように翻訳すること」とある。つまり、現代社会に馴染むように書かれたニーチェの超・入門書?!	

	<b>「旅をする木」星野道夫著作集 3</b>	
	<b>星野道夫著</b>	
	私はこの本を文庫で読んだ。文庫には友人である池澤夏樹の「いざさか私的すぎる解説」が掲載されている。「書物というものの最高の機能は幸福感を伝えることだ。(略)『旅をする木』で星野が書いたのは結局のところ、ゆく先まで一つの風景の中に立って、あるいは誰かに会って、いかによい時間、満ち足りた時間を過ごすかという報告である。」 なぜ「報告」がこんなにも心に残るのか?それぞれに感じてほしい。	

	<b>ロバート・キャパ写真集</b>	
	<b>ICP ロバート・キャパ・アーカイブ編</b>	
	「戦場カメラマンの切なる願いは失業することだ」<世界最高の戦争写真家>ロバート・キャパの言葉だ。 ウクライナで、ガザで、今も多くの人が傷つき、生活を、生命を奪われている。 この写真集を手にとりて、平和な日本から思いを馳せ、声を上げてほしいと願う。	

	<b>セミ</b>	
	<b>ショーン・タン著；岸本佐知子訳</b>	
	アカデミー賞短編アニメーション受賞経験があるショーン・タンが描いた本書。絵本のような形態・装丁ですが子ども向けの絵本ではない。私は思います。読んで楽しい明るい気持ちになるとは言えませんが、考えるきっかけにはなるかもしれません。トゥクトゥク!	


	<b>黄泥街</b>	
	<b>残雪著；近藤直子訳</b>	
	読んでいる最中もわけがわからず、読んだ後もわけがわからない奇妙な物語です。 文中には糞た糞、もちろん多くの人が苦手とするあの黒光りする虫も登場します。 動物はもれなく狂い、人は死んだり生き返ったりします。ただ、この物語がしばらく頭から離れず、一体何を讀んだのか、夢の中の出来事がわからなくなるような、不思議な読書体験ができる小説です。	



美しい日本の私：その序説

川端康成著  
；エドワード・G・サイデンステッカー英訳


雲を出でて我にともなふ冬の月  
風や身にしむ雪や冷たさ  
ノーベル賞作家・川端康成が記号を求められた際に書くとい  
う明恵上人の歌。  
本書では、道元、良寛、一休、西行等々の歌を挙げながら、そ  
こにあくあばた自身の美意識や死生観を書き記している。  
後半はサイデンステッカーによる英訳。日本の和歌と川端の  
美しい文章が英語でどのように表現されているかも知ることがで  
きる1冊となっている。



歲月

茨木のり子 [著]


詩人没後に刊行された最後の詩集です。「照れくさい  
から」生前には出版されなかったことがよくわかる、とても  
熱い愛の言葉が並んでいます。詩は難しいかも、と敬遠  
してきた方におすすめです。



ゴリオ爺さん

バルザック著；中村佳子訳


コーヒーをがぶ飲みしながら小説を執筆していたことで有  
名な、19世紀フランスの  
文豪バルザックの小説です。19世紀パリの話なので、最  
初はその舞台に慣れるまで  
時間がかかるかもしれませんが、慣れると癖強な登場人物  
達から目が離せなくなり、  
加速度的に面白くなっていきます。  
私は岩波文庫で読みましたが、読みやすいとされる新訳で  
どうぞ。



世界でいちばん透きとおった物語

杉井光著

読み終わったあと、タイトルの意味が分かり余韻に浸り  
ました。  
僕の父は妻帯者にもかかわらず、多くの女性と交際し  
ていた。  
そんな父は「世界でいちばん透きとおった物語」という  
遺稿を残していた。  
腹違いの長男からの連絡で、遺稿探しに参加すること  
になった僕であったが…  
物語はどこへ？父はどんな物語を残していたのか？予  
測不能の結末に、読み進める手が止まらない。





女の国会

新川帆立著

令和7年10月21日。第104代内閣総理大臣とし  
て高市早苗が指名される。初の女性首相の誕生である。  
さて、こちらは小説「女の国会」。なんとタイムリーなタ  
イトル。  
397ページを私は一気に読みました。犯人探しのドキドキ  
はもちろん、政治、選挙、ジェンダー問題を考えるきっかけ  
になるかも。  
薬学部分室の本なので、「予約・取寄せ」サービスを利用  
してください。


取り寄せはこちらから

タルト・タタンの夢

近藤史恵著

ホットワインのようなほっとするミステリーはいかがです  
か？  
下町の小さなフレンチ・レストラン「ビストロ・パ・マル」を訪  
れる空腹とちょっとした謎を抱えたお客様を、  
三舟シェフがおいしい料理と優しい謎解きでもてなしてく  
れます。  
読後にあたたかい余韻が残る冬におすすめのシリーズで  
す。




王とサーカス

米澤穂信著

フリーの記者が取材で訪れていたネパールで王族殺人  
事件が発生する。  
事件を記事にしようとする取材を始めた矢先、殺人事件に  
遭遇してしまい…


真実の受け止め方が人の置かれた環境によっていかに  
異なるかを深く考えられる作品です。



翻訳できない世界のことは

エラ・フランシス・サンダース著イラスト；前田まゆみ訳


翻訳ではその独特なニュアンスを表現しづらいことはた  
ちが美しいイラストと共に紹介されています。世界のことは  
には、まだまだ未知なる魅力が溢れていることに気づかせ  
てくれる一冊。「フィーカ」や「カフネ」などその後のブームで  
日本語として馴染んできたことばも載っています。リラック  
スタイムにおすすめです。あなたのお気に入りを見つ  
けてみてください！



解きたくる数学

佐藤雅彦，大島遼，廣瀬隼也著


絵や写真を使ったクイズを解いていだけで、自然と論  
理的な考え方が身に付くかもしれません。  
数学に苦手意識がある人にこそ、ぜひ読んで欲しい一  
冊です。



笑うマトリョーシカ

早見和真著


この作品は、得体のしれない政治家「清家一郎」の正  
体を追う形で物語が展開していく。  
その正体が明らかになったとき、実際にこんな思想の政  
治家がいるのではないかと想像して恐ろしくなりました。



パーク・ライフ

吉田修一著


『国宝』の著者、吉田修一の初期の作品。  
短い小説ながら、景色や表情、心の揺れを、追体験さ  
せてくれるような著者の才能を堪能できます。



夕暮れに夜明けの歌を

奈倉有里著


語学や文学を学ぶことにもランナーズ・ハイのような状  
態が訪れるようです。「文字がカッコいいから」ロシア語  
を学び始めた著者が、留学してロシア文学に打ち込み、  
卒論を書き上げるまでの日々は数々の障害はあれど、多  
幸感に満ちています。語学や文学を学ぶ人、あるいは留  
学を考えている人におすすめです。




**チョコレート・ピース**

青山美智子著


「ちょっと本でも読んでみようかな？」  
「隙間時間に、ほっと一息つきたいな」  
そんなあなたに、チョコレートがそっと寄り添う 24 編の物語を。  
短くて読みやすいから、ピター、スイート、次はどんな味？ これは好みじゃないかも？  
そんなふうに、チョコレートをつまむように楽しめます。



**掬えば手には**

瀬尾 まいこ著


「表紙のタルトがおいしそう！」という食いしん坊な理由で手に取りました。  
自分のことを「何もかもが平凡だけれど、人の心を読める力がある」と思っている大学生梨木匠。  
心の声に耳を傾け、周囲の人々をさりげなく助けています。  
そんなある日、心を閉ざした相手に出会い、なんとか力になりたいと奔走することに。  
表紙のタルトは、とても優しく暖かい場面で登場するので、どうぞお楽しみに。



**陰翳礼讃**


谷崎潤一郎文；大川裕弘写真

陰翳礼讃のタイトル通りの写真と谷崎潤一郎の文体の双方の美しさに、日本人としての心が揺さぶられる一冊だと思います。ただ写真は今の現代により近く陰影という印象を受けました。だから文章を読んで理解しづらい一面も、写真を通してイメージを感じやすくなるのではないのでしょうか。古くから光と影に美を見出し活用してきた感性や美学は今昔そう変わらないということを感じかされます。



**櫻井翔の建築を巡る旅。**


現代建築がわかりやすく解説されていますが、眺めているだけでも楽しいです。



**毎日読みます**

ファンボルク 著 牧野美加訳


書架の本を見て回ることを、図書館用語で「ブラウジング (browsing)」といいます。『受賞で話題になった本を読む』の面白さ、なんだか・・・疲れたな・・・という時に、この本を立ち読みでよいので気になったページだけでも読んでほしいです。ブラウジングって、目的の無い読書って楽しいよね、そんな気持ちになる「ようこそ、ユナム洞書店へ」著者によるエッセイです。



**メインテマは殺人**

アンソニー・ホロヴィッツ著


推理力が試される、考察系ミステリー！作者よりも先に犯人を見つけられるか？  
本作では、作者アンソニー・ホロヴィッツが「本人役」で登場！名探偵ホーソンの相棒＝ワトソン役として事件に巻き込まれます。作者に挑むつもりで、あなたも事件の真相に迫ってください。  
▲ちなみに・・・  
泣けません。  
心は温まりません。  
サクッと読めません。  
でも、考察とどんでん返しは保証します！



**鳥類学者の半分は、鳥類学ではできてない**

川上和人 著


「研究成果は論文や報道発表という形で記録に残る。その一方で、完成までのプロセスが世に知られることはなかなかない。」それはまるで、水面の上では優雅に泳ぎ、水面下で絶え間なく足を動かし続ける白鳥に近い。『足を動かし続ける』日々が、なぜかネタまみれになる理系のフィールドワークを、この本で覗いてみてください。



**あの人の調べ方ときどき書棚探訪：クリエイター20人に聞く情報収集・活用術**

平山亜佐子著


レポート作成のために図書や雑誌を探す事に苦労した学生さんは多いはず。各分野のスペシャリストによるマニアックな要素が強い『文献調査』が「なるほど、そんなルートで資料を探す方法があるのね。」と、参考になります。



**月まで三キロ**

伊与原新著


『宙わたる教室』の作者。  
私の趣味の一つ「天体観測」。クレーターが好きすぎてシーイング良い日はいつも観測。よってタイトル惹かれ書店で購入。月まで3km、実際月は地球の赤道半径の 60 倍という近距離にある天体。近地点時で 359,200km 離れている。『ちょっと月まで行ってくる』と言える日を心待ちにしている。  
どこまで、【月面 X】というイベントはご存じだろうか。  
毎月ではないのだが、上弦の月の頃、限られた時間のみクレーターに『X』の文字が浮かび上がるのだ！次回の観測可能日は 2026 年 2 月 24 日。地球にいる限り、月の裏側を決して見ることはできない。多くの科学者の名前が付けられたクレーター、月への魅了は尽きることがない。



**白いしるし**

西加奈子著


著者は小説家でもあるが和歌も嗜むという。ここでは紹介しないが『ダイオウイカは知らないでしよう』本館にも所蔵があるが是非お勧めしたい！冊。  
さて、こちらは自宅の本棚から選んだ恋愛小説である。改めて綿あめ恋愛小説と名付けよう。実態はあるのに手に取ると溶けてしまうもどかしい想い。大学生諸君、共感できるであろうか。



**小泉八雲のレシピ帖**

小泉八雲著


朝ドラの影響で小泉八雲の本が書店にもたくさん並べられています。日本の怪談が有名ですが、この本は料理本です。日本食ではありません。およそ150年前のニューオーリンズのレシピだそう。見聞きしたことがそのまま書かれているような文章ですが、読んでいくと当時の生活も垣間見え興味深いです。でも私には実際作れそうな料理はありません・・・はたして作れる人はいるのだろうか。



**Tengu**

柴田哲孝著


強大な影、巨大な掌、太い指を持つ“男”の咆哮が闇を裂く。昭和 49 年、群馬県の寒村で凄惨な連続大量殺人事件が起きた。迷宮入りとなるも 21 世紀を迎え事件解明へと向かう。『天狗伝説』とは。私の好きな作家の一人である柴田哲孝氏の有賀雄二郎シリーズ第2弾は究極のミステリー×極限の恋愛小説で開幕！





**Dancer**


柴田哲孝著


【『キメラ』とは同一個体のなかに遺伝子型の異なる組織から形成されたもの。頭は獅子、胴体は牝山羊、後部が竜のギリシア神話に登場する『キマイラ』が語源】大学の研究室から医学用実験動物“ダンサー”が逃げ出した！お馴染みポリライター有賀雄二郎と愛犬ジャックが登場、シリーズ第 3 弾はサイエンスミステリーで降臨！






	Ryu
	柴田哲孝著
	フリーカメラマンであった作者の自然描写は上手い。鼓動高鳴る洞窟探査シーン。ルポライター有賀雄二郎シリーズ第4弾は不鮮明な写真に写っていた謎の巨大生物に挑む!果たして想像に追いつくことができるか?!
	


	声を出して、呼びかけて、話せばいいの
	イ・ラン著 斎藤真理子, 浜辺ふう訳
	韓国のシンガーソングライターのエッセイ集です。韓国はキラキラしたイメージがあるかもしれませんが、「ヘル朝鮮」と言われるほどの閉そく感と生きづらさを抱える面もあります。韓国の今を生きる女性の、ヒリヒりするほどまっすぐな文章は読んでいて辛いかもしれません。でも、どうか最後まで読んでください。終わりに希望が待っていますから。
	


	作り方を作る 佐藤雅彦公式図録
	佐藤雅彦著
	横浜美術館で開催された美術展の「公式図録」です。というと美術要素が強そうなのですが、ページをめくると『あれを作ったのはこの人だったのか!』という作品がいくつも出てきます。ピタゴラスイッチなどおなじみの『シンプルだけ子どもでもわかりやすいデザインは、裏ではこうなっている』というのは、自分でも何かしらアイデアを作り出す時のヒントになると思います。
	


	文学カウンセリング入門
	チン・ウニョン, キム・ギョンヒ著; 吉川凧訳著
	「書くこと」の効用は侮れません。生きていて、何かしら鬱(キャッシュとも言うかも)が溜まってきます。溜まりすぎると気持ちがあんなだかどんよりしてきます。それをクリアするのに「書くこと」は有効なのです。やってみようかな?と思ったら第3部から始めてみてください。引用されている詩も素敵なので、読むだけでも、ぜひ。
	


	世界の食卓から社会が見える
	岡根谷実里 著
	『世界自炊紀行』と同じく、著者が普通の家庭に訪問し、いつものごはんを食べるところまでは同じなのですが、本書はそこから社会問題に敷衍していきます。的確なデータの引用による解説がとてもわかりやすいです。一番身近で個人的な「食べること」は、思ったより世界とつながっているようです。
	

	自分のために料理を作る
	山口祐加著; 星野概念対話に参加
	またパンを焦がしてしまいました…。料理がうまくできないし、できないことへもやもやをどうしようと思ってこの本を開きました。私と同じようにもやもやを抱えた方たちに、著者と精神科医がカウンセリングを行います。参加者が自分の気持ちを言葉にしていくことで、気持ちも落ち着いていくプロセスがまさにケアだと思いました。料理だけではなく、家事や仕事、あらゆることについて敷衍できる、「使える」本です。
	

	世界自炊紀行
	山口祐加 著
	私の作る料理はまずい。でも食いしん坊なので美味しいものは食べたい。一人でぐるぐるしているけれど、みんなはどんな思いで自炊しているのだろうとこの本を手にとった。結果、自炊には前向きになれない気持ちが少し楽になったような気がする。
	

	石垣りんの手帳
	石垣りん著
	タイトルに「手帳」とありますが、これは日記です。詩人の職場である銀行が作成した小さい小さい手帳に書かれた数行の出来事。鉛筆で書かれた文字からは、詩として加工される前の、詩人の生活が浮かんできます。ちよっとだけ本をめくってみてください。その日、その時に生きた人の生活の手触りが追ってきます。
	

	ユーモアの鎖国
	石垣りん 著
	「戦後日本を代表する」詩人といわれる石垣りんは、大きな冠をかぶせられてどう思うだろう。ここにつづられる内容は、仕事のこと、生活のこと、家族のことと、とても身近なことであり、小さい言葉から成っている。苦勞の多い人生から生み出された詩も、高くも低くもない目線で、着慣れた言葉なのに、私たちの心を打つ。
	

	匂いに呼ばれて
	関口涼子 著
	アロマや香水が好きな私にとって、ようやく読みたかった小説に出会えた、と思った作品です。匂いにまつわる物語というよりは、匂いが主人公の物語といった方が正確かもしれません。かぐわしい香りを放つ多くの物語を堪能してみてください。
	

	女二人のニューギニア
	有吉佐和子著 著
	今注目されている作家、有吉佐和子の旅行記を読みました。が、旅行記というような優雅なものではありませんでした。文化人類学者の友人の調査地に長期逗留することになってしまった作家の格闘の記録です。約60年前の女性だけのニューギニアでの過酷な暮らしは驚くばかりですが、ユーモアを交えつつあっけらかんと描かれているので、爽やかな気持ちになります。
